

平和活動への取り組み

純心女子高等学校3年 森 ひばり

Initiatives for Peace Activities

Hibari Mori

1. はじめに

私は、高校1年次から「高校生一万人署名活動」というボランティアに参加し、現在ではフィリピン派遣高校生平和大使として活動しています。

私が平和活動を始めるようになったきっかけは、学校の平和活動です。私の通う純心女子高等学校では、毎日平和の祈りを捧げることや、授業の中で平和に関するビデオを視聴するなどしています。特に8月9日は原爆慰霊祭やミサ、墓前祭や公の場で平和の賛歌を歌います。原爆慰霊祭では原爆の被害に遭われたご遺族を校内にお招きし、ミサや墓前祭を行います。慰霊祭に参加されるたびに涙ぐまれるご遺族を拝見し、長崎を最後の被爆地にしなければならないと強く感じさせられます。また、高校1年生は毎年、平和公園で行われる平和記念式典で「千羽鶴」を合唱しています。歌を通して平和のメッセージを全国に伝えることが出来る唯一のチャンスなので、何カ月も前から練習をし、心を込めて歌っています。卒業生の中には、被爆者に代わって原爆の話をする語り部として活躍されている方がいます。私が高校1年生の時には、本校の卒業生である松野世菜さんが原爆の話をしてくださいました。松野さんは高校在学中、被爆継承ボランティアに参加し、大学生となった今でも被爆者に代わって原爆の実相を伝えています。私は中学、高校と純心でこのような平和学習をするうちに、今を生きる私たちが戦争の悲惨さを後世に伝えていく必要性を感じました。

2. 平和活動への参加

そんなとき、学校の掲示板に貼られていた一万人署名活動を知り、参加を決意しました。

一万人署名活動とは、高校生平和大使の発足をきっかけに始まった活動です。高校生平和大使とは1998年、NPT 核拡散防止条約に加盟していないインドとパキスタンが相次いで核実験を強行し、核兵器の拡散に危機感を感じた被爆者が、長崎の高校生に被爆者の思いを代弁してもらおうとニューヨークの国連本部に高校生を派遣したことが始まりです。1999年の第2代まではアメリカ・ニューヨークの国連本部へ、それ以降の第3代からは軍縮会議が開かれるスイス・ジュネーブの国連欧州本部を訪問しています。高校生平和大使は国連で「ヒロシマ・ナガサキ・ピース・メッセンジャー」として認知され、核兵器の廃絶を求めるスピーチなどを行っています。毎年、高校生平和大使の募集はありますが、なれる数には限りがあります。平和大使にはなれなかったけれど、「平和のために何か行動をしたい」と考えた高校生は、2001年、「核兵器の廃絶を目指す活動は自分たちの力で」と考え、1万人署名活動を立ち上げました。これまでに17万筆もの署名を集め、国連に提出し、このボランティアは国連が唯一認める署名活動となっています。

私は、高校1年次から一万人署名活動に参加し、毎週日曜日には核兵器の廃絶と平和の世界実現を求める街頭署名を行っています。他にも、修学旅行生との平和交流や災害時復興支援のための募金活動、そして1年間を通し学用品を集め、貧困国に届けることです。同級生や先輩方が平和大使として世界に平和を発信し活躍する姿を見て、私も日本はもちろん海外にも発信していきたいと思い始めました。そんなときフィリピン派遣高校生平和大使として選んでいただき、2019年の1月にフィリピンを訪問してきました。

3. フィリピンでの活動を通して

フィリピン派遣の目的は、主に二つあります。一つ目は、1年間を通して全国各地から集めた学用品や奨学金を自立支援施設の貧しい子供たちに届けることです。二つ目は、現地の方々に長崎原爆の被害を紹介し、核兵器廃絶を訴える署名活動を行うことです。私のスラム街のイメージは、道やそこに暮らす人々が暗く夢や希望がないというものでした。確かに、道にはゴミが散乱していて綺麗とは言えない状況でした。しかし、スラム街の子ども達は私の予想とは全く違い、明るくフレンドリーに接してくれました。そこで、彼らに将来の夢や目標があるのかと疑問に思い、夢を伺うことにしました。「What is your dream?」と問いかけると子どもたちは目を輝かせながら、「警察官になりたい」「看護師になりたい」「教師になりたい」などそれぞれの夢を語ってくれました。スラム街で暮ら

す子どものほとんどは、支援なしに十分な教育を受けられません。そんな状況にも関わらず、夢に向かって勉強に取り組んでいるという話を聞き、少しでもこの子どもたちの力になりたいと思いました。

自立支援施設へ訪問した際には、子供の多さに衝撃を受けました。一つの教室に人が入りきれない様子で、それだけ多くの方が貧困で苦しんでいることを知りました。私は、施設で長崎原爆のスピーチを行いました。スピーチの間は静粛を守り、しっかり耳を傾けて聞いてくれたことが印象的です。スピーチ後には、子どもたちと核兵器廃絶を求める署名活動をし、お互いの国の問題を理解し合うだけでなく、絆を深めることが出来ました。自立支援施設の運営者であるエルリータさんとお話しをする機会があり、施設が世界中の寄付金で運営されていることを知りました。寄付金を有効に使い生きたお金にするためには、自立していくための教育的支援が大切だということを教わり、寄付することよりも寄付金の使い道を考えることの方が重要だと分かりました。

また、学用品は子供だけでなく大人の方々にも役に立っていることを教えて頂きました。フィリピンには様々な理由で家族と疎遠になった人がいます。今まで家族と連絡を取る手段がなかった人が、私たちが届けた鉛筆などの学用品を利用して家族と連絡が取れたというお話を聞きました。学用品を必要とする多くのフィリピン人の手に渡り、役に立っていたことを嬉しく、活動の意味を感じる事が出来ました。

貧困は、物資競争のために戦争が起こりやすいと言われています。私は戦争が起こらないようにするためにも、貧困下で暮らす人々を貧困から救いたいです。そのために私は多くの人に貧困の現状を伝え、先進国による教育的支援を促す活動をしていきたいと考えています。

4. 最後に

戦争は誰も幸せにしません。それを被爆地で育った私たちが伝えていくことが大切だと思います。私は平和活動をするうちに、自分にもできることがあるということを知りました。核兵器の脅威にもっと一人一人が危機感を持って、小さなことからでも行動していかなければなりません。一万人署名活動の大きなスローガンである「微力だけれど無力ではない」。この言葉を支えにもっともっと多くの人と語り合い、日本だけではなく平和を海外にも発信していきたいと思っています。